

私のそれいゆ日記

駆け出し記者の銀座八丁



画家、人形作家、ファッションデザイナーetc…と多彩な分野で才能を発揮した中原淳一が「女性の暮らしを新しく美しく」と創刊した女性誌「それいゆ」。

昭和32年、最盛期を迎えていた「それいゆ」編集部に飛び込んだ22歳の駆け出し記者が全速力で駆け抜けた青春の日々の回想録。

風詠社

加藤 良一

Facebookのお友だち、^{うつみよしこ}内海宜子さんが女性誌「それいゆ」の記者時代を回顧するエッセイを出版された。早速取り寄せて読んでみた。雑誌記者らしい筆致で、楽しかったことや辛かったことなどをしなやかな感性で展開している。^{よしこ}宜子さんの著書を読むのは『おばあちゃんの一人旅、パリはごきげん♪』に続いて2冊目である。

「それいゆ」は、中原淳一さんが戦後間もない昭和21年(1945)8月に創刊し、季刊・隔月として刊行されていた。昭和35年(1960)8月廃刊となるまで、全63冊が発行されている。

中原淳一(1913-1983)は、画家、ファッションデザイナー、編集者、イラストレーター、人形作家という多くの顔を持っていた。「それいゆ」はフランス語で太陽のこと、創刊号は『Soleil』と題されたが、のち『ソレイユ』となり、第9号以降は『それいゆ』となったという。創刊当初は木部清、藤田嗣治、長沢節などが表紙を描いており、中原淳一も、多くの表紙絵を描いた。創刊号には当時新進のヴァイオリニストだった諏訪根自子さんの写真つきコラムが載った。



面接試験で編集長を怒らせたが、無事採用決定！

宜子^{よしこ}さんは、早稲田大学仏文科の4年時に卒論を提出したのち、卒業式を迎える前に銀座八丁目の出版社「ひまわり社」に見習いとして就職した。昭和32年(1957)、22歳のときだった。

出版社志望の友人と何社か回った最後に辿り着いたのが、ひまわり社だった。入社試験で疋田寛吉編集長の面接を受けた。自己紹介で、卒論のテーマに選んだフランスの作家ジャン・ジロドウについて話した。ジロドウは当時まだ邦訳本も出ていない作家で、あまり知られていないと思い、「ご存じないかも知れませんが…」と切り出したとたん、「失礼な！ ジロドウぐらい、良く知っていますよ！！」と怒りを買ってしまった。

もちろん編集長を見くびって話したわけではなく、経歴の一つとして持ち出したつもりだった。この一件で、ひまわり社は諦めていたが、社長による第二次、第三次の面接を経て最後まで残り、宜子^{よしこ}さん一人が採用された。初任給は八千円だった。そして、配属されたのが「それいゆ編集部」だった。

女性の暮らしを新しく美しく

新米駆け出し記者として、ファッション関係のアシスタント、作家の原稿取り、インタビュー記事のまとめなど、忙しく走り回る日々については本書を手にとってご覧頂きたい。若き日の記者生活を掘り起こしながら、懐かしく辿っている。

「それいゆ」という女性雑誌は、さまざまなコンテンツから成り立っていた。本書では、下にあるような多くの著名人との出会いや人間模様が紹介されている。



「それいゆ」を創刊した中原淳一さんは、ユニークな人である。宜子^{よしこ}さんは、アイデア溢れる才能の持ち主と評している。画才を生かして「それいゆ」の表紙を何度も描いている。その画風は「竹久夢二派」を思わせ、一冊の中に「女性の暮らしを新しく美しく」するための記事が溢れていた。

中原淳一さんの奥様は女優の葦原邦子さんだった。豊島区の千川の大きな家に住んでいた。木の門の潜り戸を抜け、飛び石を行った先の玄関に入るとすぐに広いアトリエがあった。そこにはグランドピアノが置かれていた。

ある晩、このアトリエの片隅で^{よしこ}宜子さんはファッション記事の修正を何度も命じられていた。今どきのような便利な文房具などない時代だから、使うのは鉛筆と消しゴムだけだった。傍らには消しゴムのカスが散らばっていた。中原先生の目は厳しく、ご自身の描いた作品だから、答えはおのずとわかっていたものの、^{よしこ}宜子さんがどうやってそこへ辿り着くかを待っていたという。まさに今でいうところの“On the Job training”であった。

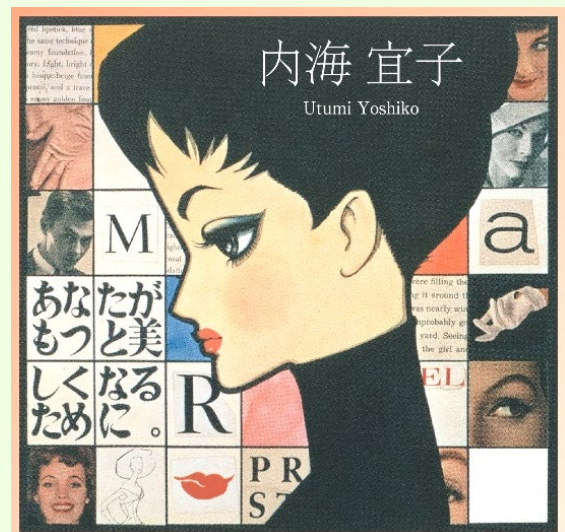
夜も更けた深夜、テレビの仕事を終えた葦原邦子さんが、帰ってくるなり、二人分のお茶を用意し、テレビ局から頂いたという海苔巻きと共に差し出してくれた。それから、また原稿書きに戻り、仕上がったころには朝日が差し込んでいた。

「それいゆ」との別れ

ある日の夕方、いつものように帰りが遅くなりそうだったので、出前のカツライスを注文したところに、突然来客があった。「恰幅の良いいなせな老紳士が、ハンサム青年と立って」いた。

「内海です。倅は遠いので、父親がご挨拶に来ました！ これはすぐ下の弟です」

札幌の姉夫婦の計らいで見合い話が進んでいたのである。外でお話をと、資生堂パーラーに誘われたので、上司の了解を得てお供した。「コーヒーとケーキなどいかがでしょう？」と聞かれるや「すみません。あの、サンドイッチを頂きます。これから仕事ですので」…



札幌に住んでいたその当人と直接会ったのはゴールデンウィークだったが、^{よしこ}宜子さんはその年の秋には札幌へと向かった。大車輪で駆け回っていた駆け出し記者は、とうとう寿退社することとなった。

^{よしこ}宜子さんは昭和9年(1934)、東京都世田谷区松原に生まれた。東洋英和学院から早稲田大学仏文科を経て、出版社「ひまわり社」に就職し、1年半という短い期間ではあったが、濃密な記者生活を過ごし、結婚のため退職した。本書はこのときの体験を述べたものである。今年米寿を迎えるが、今でもお元気で好奇心を忘れず過ごしておられる。

【関連資料】

『おばあちゃんの一人旅、パリはごきげん♪』 (SE-111)

http://rkato.sakura.ne.jp/sentakubune/se111obaachan_no_hitoritabi_pari_wa_gokigen.html

2022年8月26日



「洗濯船」TOPへ



Home Pageへ